

『双蝶蝶曲輪日記』六段目「橋本」冒頭描写の意味

—「けいせい浅間嶽」の活用と澤村長十郎—*

黒石陽子
(国語・国文学)

一 はじめに

『双蝶蝶曲輪日記』は、一段目から五段目までを現在の大阪市内を舞台として話を展開させた後、六段目になると舞台を橋本に移す。橋本は現在の京都府八幡市にあり、大阪と京都のちょうど中間からやや京都よりという位置にある。この地は、登場人物の山崎与五郎の妻お照の実家のあるところである。それまで大坂の町中で練り広げられてきた吾妻をめぐる身請け騒動が、与五郎と吾妻の駆け落ちという強引な行動によって、大坂の外に移動する。そして橋本の地で、家族、親戚との関わりの中で新たな展開を練り広げることになる。

六段目冒頭は新たな登場人物の紹介や、それぞれが置かれている状況等を説明することから始まるが、ここには複雑な工夫が凝らされている。その重要な要素となるのが、歌舞伎狂言の「けいせい浅間嶽」である。本稿では『双蝶蝶曲輪日記』六段目の冒頭部分において「けいせい浅間嶽」がどのような効果をもたらしているかを考察する。また、これに関わる役者澤村長十郎の扱いについても、本作上演当時の大坂の観客の目を考える立場から明らかにしてみたい。

二 「けいせい浅間嶽」を踏まえた作劇上の効果

思ひなくて敷入りしたき。親里に。与五郎が嫁お照。去らる、となく去るとなく呼び戻されて、明け暮れに。しんきく／＼のぶら／＼病。さのみ床には付かねども。つれなき床も懐かしき。

で始まる六段目冒頭部分は、一段目、二段目、三段目、五段目で描かれて来た山崎与五郎と大坂新町の太夫吾妻との恋の陰に、与五郎の妻のお照がいたことを明かす語り出しとなっている。お照は元武士の橋本治部右衛門の娘であり、橋本に実家がある。嫁入り先の与五郎の屋敷は淀川を挟んだ対岸の山崎にある。舅山崎与次兵衛は大変な身代であり、大名貸しをしている。

前段までに描かれて来る内容は次の通りである。与次兵衛は持病が出たために、大名の為替金を自分で受け取りに行くことができず、仕方なく変わりに息子の与五郎を大坂に行かせた。父与次兵衛の心配していた通りに、初めて大坂に行った与五郎は新町に入り浸って、遊女吾妻の身請け騒動を起こす。理由をつけては数ヶ月も戻って来ないで与五郎の様子に、嫁お照は、与五郎が自分を気に入らないために、こうした騒動も起こるのではないかと気に病んでいる。そうした娘の様子を心配した実父治部右衛門は娘を実家に呼び戻していたのだっ

た。

お照が塞いでいるのを見て、世話をしている下女は、楽しい話でもして元気づけようと次のように話し始める。

お気のもつれを慰める。下女が按摩も話し伽。申し御寮人様。わたしや先日お隙を貰ふて。京の芝居見ましたがな。江戸役者の中村七三。二の替りの浅間嶽。見て参りましたが、面白いことござります。女形は花井吾妻。

奥州といふ太夫になつたよき。それは／＼七三が傾城買、どうも言へぬ。あれなりやほんにどつちやからも。惚れる筈ぢやと思はれますでござります

す
下女が見て来たとしているのは実際に京都で上演された「けいせい浅間嶽」である。これは元禄十一年一月に京都四条名代早雲長太夫・座本山下半左衛門の大芝居で初演された。役割は小笹巴之丞が初代中村七三郎、奥州は岩井左源太であった。本作に出て来る花井吾妻は、同時代の若女形であるが、この時の奥州は勤めていない。^(注1)ならばなぜ花井吾妻の名前を出して来たのだろうか。

その理由の一つは、その後のお照の述懐によって明らかになる。
よその噂も身に当り。ムンその花井吾妻とやら。傾城になるかや。ア、見たいことじやなう。吾妻といふ名で太夫になれば。与五郎さんの惚れてござる。藤屋の吾妻も同じこと。どのよにすれば殿達に思はるゝのじや、わしや見たいと、いとゞくよくゝ

奥州という傾城になる役者の名前が「吾妻」であることから、与五郎の惚れている太夫吾妻に連想がいつて、お照は余計に気が塞いでしまう。せっかくの下女の発案も逆効果になってしまふという滑稽さがこの部分の工夫であろう。

しかし「けいせい浅間嶽」をここに出したのは、これだけのためではないようである。その理由は二つ考えられる。第一点は「けいせい浅間嶽」が京都・江戸・大坂のいずれにおいても、初演以降、何回か上演された作品で、当時とりわけ知名度の高い狂言であったことである。したがって、「けいせい浅間嶽」で使われる設定や趣向は多くの観客にとって有る程度の共有事項であったはずである。第二点は、「けいせい浅間嶽」は三都で繰り返し上演されたが、その中でも尤も頻繁に上演されているのは京都であった。大坂ではあまり上演されていない。これは京都という場所を観客に意識させるねらいがあったので

はないだろうか。以上二点に注目して以下具体的に検討を進めることとする。

「けいせい浅間嶽」の人物関係は巴之丞が遊女奥州と許嫁おとはの前の双方から慕われるというものである。これは本作の与五郎・遊女吾妻・妻お照との関係に重ねることが出来る。またお照がぶらぶら病であるのは、「けいせい浅間嶽」で奥州が巴之丞を思つて病がちであるのと重なる設定であろう。

このような人物関係の類似以外に、駕籠昇きの趣向の利用がある。「けいせい浅間嶽」の駕籠昇きの趣向は、許嫁がありながら傾城奥州と深い仲になった故に勘当を受け、駕籠昇き七兵衛となつていた小笹巴之丞と、諏訪家から阿呆払いにあつて巴之丞と同じ長屋に住んでいた花岡和右衛門(作兵衛)が互いを知らずに相棒となつて、禿を乗せて浅間の開帳まで行くという場面である。後に「戻駕」となつて行くこの場面は、「けいせい浅間嶽」の中の代表的なものの一つといえるだろう。

二人を中心として滑稽なやりとりが続くが、結局七兵衛だけが禿を背負つて浅間の開帳まで行くことになる。途中で、ある姫君の道中に出会う。禿の歌に心惹かれた姫君が、二人を呼び寄せる。話のなりゆきから、七兵衛が巴之丞であり、姫君は巴之丞の許嫁のおとわの前であるということが明らかになる。

このような、駕籠昇きという身の上の一つのきっかけになつて、探し求めていた相手に邂逅するという設定が、本作の六段目にも重要な要素として使われている。本作六段目冒頭で、与五郎と吾妻を相合駕籠にして乗せてきた駕籠昇きは甚兵衛と太助の二人である。このうちの甚兵衛は老人だが力自慢の人物である。この人物は実は遊女吾妻の父親であり、吾妻が六つの年に一家離散したために、別れ別れとなつていた。駕籠に乗せた時には甚兵衛も自分の娘であるとは気付かなかつたが、与五郎、お照や橋本治部右衛門、山崎与次兵衛の話を脇で聞いているうちに、事情が分かり、自分の娘であることに気付いたのだ。これは具体的な展開は異なるものの、「けいせい浅間嶽」の巴之丞とおとわの前の邂逅と類似した発想であり、観客に「けいせい浅間嶽」を想起させる効果を持つのではないだろうか。

次に三都における「けいせい浅間嶽」の上演について検討する。三都における上演の様子については享保十六年三月刊の役者評判記『三ヶノ津／浅間嶽二の替品定』を中心資料として考察した。^(注2)

三都における上演を見ると、享保十六年までに、京都は初演を含めて九回。江戸は元禄十三年正月より五回。大坂は四回となる。江戸では曾我狂言に仕組むなどして、江戸好みに改変して上演した。一方大坂でも「けいせい浅間嶽」の外題で上演することはまれで、ところどころの趣向や場面を入れ込んで上演したらしい。^(注3)したがって場面や趣向は大坂の観客にも良く知られていたことになる。だが京都で大当たりした時に大坂にも持って来たが、あまり当たらないことが次の記述から分かる。

都にて中村七三郎。三十年以前にあさまを大当せられしのち。山下半左衛門難波にて。けいせいあさまが嶽とかんばん出し。都にて巴之丞になられし。櫻山四郎三を相手にして。いたされぬれども。さのみはづみもいたさず。

ただし後に正徳四年正月に初代澤村長十郎が巴之丞で勤めた時には当たった。^(注4)しかし、それぞれの土地の好みとして考えると、京都に比べて大坂は「けいせい浅間嶽」に対する反応はそれほど熱くはない。同評判記の大坂の巻の記事に「とかくあさまは三ヶ津の中では。京がき、めつよし。いかなるゆへぞいぶかし〜。」とあり、その嗜好の相違に触れている。

以上のことから考えると、享保後期の大坂の観客にとって、「けいせい浅間嶽」の中の局面や趣向は熟知しているが、「けいせい浅間嶽」という独立した形ではあまり上演されなかった。唯一当たりを取ったのは正徳四年に初代澤村長十郎が巴之丞を演じた時であった。その流れはその後の上演状況を見ても、本作初演の寛延二年までそう大きくは変化していなかったと考えられる。

本作六段目冒頭部で「けいせい浅間嶽」を出して来た効果は、一つには架空の「けいせい浅間嶽」上演として設定することであった。元禄十一年二の替狂言の初演のように見せながら、奥州役の役者を花井吾妻にすることで、その上演は実際のものではなくなる。本作の時間設定は曖昧になるのである。次に「けいせい浅間嶽」の趣向や設定を使い、イメージを想起させながら、この段の状況設定を巧妙に行っていく。また大坂で「けいせい浅間嶽」の巴之丞で当たりを取った役者は初代澤村長十郎であった。このことからこの後に出てくる「長十郎」の名前にも連想が行くことが考えられる。さらに京都でさかんに上演された「けいせい浅間嶽」を出すことにより、京都文化圏であった橋本の土

地の雰囲気を引き出す役割を果たしている。当時の大坂の観客はこうした布石を十分に把握し、感じ取り、面白く思っていたのではなからうか。

三 初代・三代目澤村長十郎の存在

六段目冒頭部分で登場する与五郎の描写についてとりあげる。与五郎と吾妻は新町から駆け落ちして、身を隠したいと思うが、与五郎が思いついたのはこともあろうにお照の実家であった。遊女吾妻と二人で一つ駕籠に乗り合わせ、窮地に陥つていながらも、すっかり色男ぶっている様子が滑稽に描かれる。駕籠から降りて

コレ吾妻。かう二人乗つたなりは。角にいの字で四角な長十郎。見立てがきついかけうといか。駆落しても口減らぬ。面白病は一盛り。橙にてや直るらん。

ここで登場する役者名は長十郎である。「角にいの字」は男女が一つ駕籠に乗っている艶つぼさを見立てている。それと同時に「丸にいの字」の長十郎の役者紋を連想させる。さらに与五郎が自分の色男ぶりを長十郎に見立てる。という趣向が盛られている。長十郎の名前は、そうした上方の色男を演じる役者の代名詞としての意味があったものである。本作上演当時の長十郎は三代目になったばかりの澤村長十郎（初代澤村宗十郎）であった。しかし三代目は長く江戸で活躍した役者であり、必ずしもこの時点では大坂に馴染みのある役者ではなかった。むしろ大坂の観客にとっては十数年前に亡くなった初代の面影の方が鮮明であったように思われる。ここにはどのような事情をふまえた工夫がなされているのだろうか。前章で指摘した通り、初代長十郎は、大坂で唯一「けいせい浅間嶽」の巴之丞で当たりを取った役者である。冒頭部分で工夫されている「けいせい浅間嶽」の暗示がこの長十郎の導き出し方とどのように関係してくるのだろうか。恐らく当時の大坂の観客の役者観を踏まえた上での作意があるように思われる。

寛延年間初めという時期に大坂の人々にとって、まだ初代の長十郎の面影が色濃く残っていたであろうと推定するのは、次のような理由からである。初代

長十郎は享保十九年に没した。初代の次男である二代目長十郎は享保二十年から元文四年までのほぼ四年間を二代目と名乗って後、没した。長十郎の名前はしばらく空席となるが、弟子の初代宗十郎が延享三年の数ヶ月間三代目を名乗ったのち一度澤村宗十郎に戻り、再度延享四年から名乗って寛延年間、宝暦三年までのおよそ六年間長十郎を名乗っている。^{注5}『双蝶蝶曲輪日記』が上演された寛延二年はその三代目長十郎が誕生して二年後であり、初代没後十五年目にあたった。二十数年にわたり江戸で活躍した三代目長十郎の印象は、大坂の観客にとってはまだ馴染みの薄いものであったろう。

東晴美氏は初代長十郎について『岩波講座 歌舞伎・文楽 第2巻 歌舞伎の歴史I』の「享保歌舞伎(上方)」の中で次のように説明している。

長十郎は、正徳、享保期を通じて、京、大坂で立役の第一人者の地位を得た役者であった。最初は山下半左衛門や坂田藤十郎の影響下に、若殿役を勤めることが多かったが、正徳期に芸風を改め、以後は忠臣役などを勤めることが多くなる。「和実」以外には、「実恵がかり」の芸もよく演じた。

氏の指摘されるとおり、初代長十郎は大坂と京都を中心に活動した役者で、結局江戸には下らないまま享保十九年に没した。

先にも触れたが、初代長十郎の弟子初代澤村宗十郎は大芝居の初舞台は大坂であったが、役者として修行し、名をあげたのは江戸においてであった。役者評判記の記述を元に寛延二年までの活動と評判を眺めていくと次のような特色が見られる。

I 享保四年から享保十年

やつし事を中心として、上方役者の芸風を踏まえての開拓期。

II 享保十一年から享保十七年

上方の名人の透き写しといわれ、江戸の者は認めても本場の上方の芸とは異なると批判。一方で師匠長十郎と比較され、芸の見劣りがしないと評判される。

III 享保十八年から享保十九年

「けいせい買の開山」と評され、師匠長十郎に劣らない、むしろ優れているとの評価。

IV 享保二十年から延享二年

「今市川と勝負なしの両輪の立テもの」と評され、やつしばかりでなく、あらゆる役をこなすようになる。この時期大坂へ上る。

V 延享二年から寛延二年

京都での大岸宮内役の成功

次に各時期について具体的に検討したい。

I 享保四年から享保十年

この時期には役者評判記の記事に、「よくく見物の心になふたるにや長十はだし中村七三このかたのやつしがたとのほうびはお仕合。」(『役者若咲酒(江戸)』享保六年正月刊)「今では色事仕の随一と。諸見物二ほうびせられ給ふ。こまか二気のつく思入のふかい藝。あづまノ長十郎と申がにくうござらぬ。……三芝居の十郎の随一と稱美。」(『役者噂風呂(江戸)』享保六年三月刊)「惣たい藝のいきかた。上がたの長十殿にてなんでもいたされ。殊二長十殿のやう二。びくく/とせらる、くせがないゆへ一はいよし。」(『役者春空酒(江戸)』享保八年正月刊)「古七三殿跡おといふ人。……先生澤村長十郎殿風。今江戸のやつし開山。」(『役者三友會(江戸)』享保九年三月刊)「惣たいは長十殿の流儀に。山下京右殿の形を少し加へて。よくこなさる。」(『役者美野雀(江戸)』享保十年正月刊)とあるように、元禄期から正徳期にかけて活躍した役者名が挙げられており、元禄歌舞伎の当たり芸を初代宗十郎が真似ながら修行をかさねていた様子が伺われる。師匠の初代長十郎の名前が度々見られるが、江戸の和事芸を生み出し、上方で「けいせい浅間嶽」で当たりをとった中村七三郎の名前もあげられている。

II 享保十一年から享保十七年

この期の特徴は、上方下りの評者と江戸地者の対立の形をとり、上方の本場の芸と宗十郎の芸を比較する方法で宗十郎を評することである。既にI期の『役者美野雀(江戸)』(享保十年正月刊)に「上かたにてのおつとめの時を思へば。あれ程にも上手になる、ものかと。下り衆の御見物は我をおつてござる。」とあって、上方にいた当時に比べての上達ぶりを「下り衆」を引き合い

に出して評していたが、この時期はより明確な形で意識的に上方からの下り衆を登場させる方法をとっている。『役者正月詞（江戸）』享保十一年正月では京下組対地組。『役者袖香爐（江戸）』享保十二年正月では上かた見物対地見物。

『役者色紙子（江戸）』享保十三年三月では下り組み対宗十組。『役者登志男（江戸）』享保十四年正月では京店男と地生若男。さらに同様の組み合わせはこの後も享保十六年まで続く。^{注6}

こうした評者の設定は、「上方の本場のやつしの芸を知っている者」対「江戸の宗十郎最良」という共通の枠組みであり、宗十郎の芸が上方役者の芸を真似たものである。という観点と、しかし、宗十郎はそれを自分のものとして、江戸では人気のある実力者であるという二つの観点があつたことを示している。このことは江戸では確かに人気、実力があるが、果たして上方で通用するのかわくという疑念が存在したことを表している。

例えば上方の名人の透き写しといわれ、師匠長十郎と比較される評判には次のようなものがある。

京下組 師匠の長十殿も及ぶまいとは。はなのさきにゐられぬ故に。鳥ない里のこうもり。いかな／＼一所におひては。やき味噌と。さほ竹ほどのちがひ。又々長十殿はよつ程手あつう見へます。外が赤づらに大太刀はいてぶたいをふみぬくわろたち多き中なれば。さふ思はる、はことわりながら。太儀ながら上がたへのほいて。根本の澤村殿を見て下され。透寫しと。本繪ほどちがふたものでござるぞ

『役者正月詞（江戸）』享保十一年正月刊

上かた見物 當世の色事師とは。都では申されぬ。一から十迄。京の上手衆の形をうつしてなざる、。物覚のよいきような人で。坂田山下澤村の藝を。其ま、すきうつし。自分の藝が見たい／＼

『役者袖香爐（江戸）』享保十二年正月刊

下り組いはく お師匠の根元澤村殿を。見られぬゆへに。世には藝者もなにも、やうに。御ふいてう。皆此人の藝は。澤村長十殿の以前せられた。

藝を見おぼえて。其形をすぐうつされ。自分の藝といふものはみぢん是迄見申さぬ

『役者色紙子（江戸）』享保十三年三月刊

京店男 都には此人師匠長十殿。といふ名人あり。其風に山下京右の物まねをして見せらる、故に。いつでも當りをとらる、。よふ覺られて。うつさる、事じや迄

『役者登志男（江戸）』享保十四年正月刊

京下り若キ者 長十殿も及ぶまいとは。ちと過言で有ふ。此度の狂言は。坂田藤十があて置れし。佛の原といふ上手藝。藤十や大和山などの。名人藝を見もせずにあて。何を見くらべものにしてよいとは。おかしうて腹のかはがくねる／＼

『役者美男盡（江戸）』享保十五年正月刊

京下り若男 ……上がった目で替りめ／＼を見ますに。みな上がった坂田山下扱は御師範の長十殿のまねをしてあてらる、。取賣あきんどにひとしく存る。……中／＼上がったの優美といふ藝は。又味ひのある事ござる。くらべものがなさに。お上手／＼お仕合

『役者若見取（江戸）』享保十六年正月刊

げち／＼いはく ……此人の藝は。上がったの狂言を。ねぢなをしてやらる、が。其狂言坂田氏がした所は。藤十郎でやり。長十がせられた藝は澤村をうつし。實事は山下を似せ。自分一流といふ。うぶの藝が見へず。よは上がったの名人共の。風をのみこまれた物じや。宗十郎殿の一ぶんの藝が見たい迄

『役者春子満（江戸）』享保十七年正月刊

一方、師匠長十郎の芸に見劣りがしないと評判されるものには次のようなものがある。

采助いはく 此人の今の御盛。御當地にて色事師の随一。上がったの御師匠さまが下られたと。ねんもない。今此人程に。諸見物をなびかしはなされまい。當流ひんぬき／＼

『役者色紙子（江戸）』享保十三年三月刊

【判者親仁曰】今時角のとれた本ノ粹はない物でござる。藝者も其通り。三ヶ津に實事師は多ござれど。やはらかな優美な事をする衆はすくなふござる所に。此人上がたにては。長十殿の方にうづもれてゐられましたに。與風下られ御當地のぶたいをふみそめられ。今日の出の和事師の随一〳〵

【役者登志男（江戸）】享保十四年正月刊

【評判頭取曰】日の出の色事師。上がたの長十殿は。次第に年がふるびますゆへに。色にかゝつた狂言は。おもはしからぬに。此人は年も藝も今が盛色事のうつりよく。御江戸立テもの、三幅對の其ひとり。當流のできもの〳〵

【役者二和櫻（江戸）】享保十四年三月刊

【繪師いはく】三ヶ津に今色事師を。此人ほどにするわろは稀なり。優美によくいたさるゝ。御師匠の長十殿も。およぶまい〳〵

【役者美男盡（江戸）】享保十五年正月刊

【春六いはく】御當地にて和事師のお上手。實を兼た仕打わけてよく。今できのき、男。御師匠の丸にいの字も、角をおらしやるくらゐ。お名人〳〵

【役者春子満（江戸）】享保十七年正月刊

以上のことから、この時期の宗十郎は、師匠の初代長十郎に比べてどの程度の役者としての力量を持っているのか、果たして本場の上方で認められるのかという二つの課題を突きつけられていたといえよう。

Ⅲ 享保十八年から享保十九年

この時期は上方下り対江戸者という評者の対立の方法は廃され、「けいせい買の開山」と評されて、師匠長十郎に劣らない、むしろ優れているとの評価を得るようになる。初代長十郎の評は享保十年代に入ると芳しくないものになってきていたが、享保十九年に初代が没し、宗十郎の評価も変わって来たものであろうか。以下に評判記の記事を示す。

【針右衛門曰】此人の一分の藝が見たい。万ツ屋の宗十郎殿と申は。是じや〳〵……惣躰の藝が。長十殿をはじめ。坂田山下をまぜてやらるゝゆへ

自分の藝といふものはつゝに見ぬ。上がたの長十郎殿が。此度下らるゝはづであつたげなが。どふいふことやちがふて。俄に榊山殿が下られた。お師匠の長十郎殿が下られたら。よつ程けんべきじやあらふに。仕合〳〵

【澤宗組曰】……京大坂でこそ長十〳〵ともてはやせ。すでに伊勢では味噌つけられた。見ぬが花であらふ中々此澤村殿程には。賞翫はあるまい〳〵

【役者節饗應（江戸）】享保十八年正月刊

【廣八いはく】上がた衆に。此人の藝の様子を尋ぬるに。師匠澤村風はどこやらにありといへど。惣躰優美に。今三ヶ津に。是ほどに和事をする人は稀なりと。和なる藝を好まるゝ、都衆の評判からは。御當地のみにて色事師共いはれず。根元の澤村殿がお下りなされたと。今此人ほどに。ねんもない當りはとられまじ。

【役者三津物（江戸）】享保十九年正月刊

けいせい買の開山。色道八宗見學。女色喜契師上人。天性の至り大じん。……お江戸の色事師藝功をへて鳥井をとびこへた妻戀稲荷

【享保十九年江戸・大坂評判記】享保十九年三月頃刊

Ⅳ 享保二十年から延享二年

この時期の特色は江戸の二代目市川團十郎とともに初代宗十郎が江戸の大立者として位置づけられるにいたったことである。具体的には次のような評判記の記事が挙げられる。

今にては市川に見増の上あつはれ仕升といふ名人。……今市川と勝負なしの両輪の立テもの。

【役者初子讀（江戸）】享保二十年正月刊

團十殿はお江戸二代の名物男。宗十殿も和實ノ當世男

【役者櫻木顯（江戸）】享保二十年三月頃刊

今海老蔵殿と此人を。両輪の様に申せば。

【役者懐中曆（江戸）】元文六年正月刊

芝居古吟味の序に。市川沢村が上に立ん事かたく沢村は市川が下に立ん事かたくと有れば。双方同格の名人【役者若歌水（江戸）】寛保三年正月刊

【頭取いわく】

市川沢村は車の両輪神前の狗。どちらがなうてもならぬ東の名物。【役者福寿想（江戸）】延享二年正月刊

またやつしの芸や和事ばかりでなく、あらゆる役をこなすようになる。以下に評判記の記事を示す。

【京下りの若旦那云】

今やつしは此人。嵐殿下られたれ共。病氣故春狂言計に出。ついお上り有。此宗十郎殿はぬれ計にあらず。顔紅にぬり赤親仁。いとびんの男だて。其うつること。とき立テの鏡に向ふがごとし。何させてもその面白さ。沢殿巻頭。せめて引合す筈。はなして次に置は吞込ぬぞ。仕なをせ〜……【勘七聞て】……今やつしがたは此人。京へのぼして見たいたしかに当るは此人〜【役者年徳棚（江戸）】元文三年正月刊

【若旦那徳四郎出】

扱当風男は此人。男達風。赤顔でも。何藝でも仕残さるゝことなし。【役者紋楊柳（江戸）】元文三年三月刊

【京下りいとやノ曰】

五色の糸なんでもなさる、お上手。故沢村長十殿のお弟子にて善五郎と申たはちがいでござつたか。扱もきつい御立身いと目のしつかりとした中村座のおさへと存る

【役者大極舞（江戸）】元文四年正月刊

三ヶの津に実事師は多けれど。優美な色事師は此人計。ほんに何をなされても。当らぬといふ事なく。今日の出の和事師の第一〜

【役者若歌水（江戸）】寛保三年正月刊

長年上方の本場の芸とは違つと評されて来た宗十郎であったが、既に江戸で団十郎と並べられ、押しも押されぬ存在として認められるようになり、いよいよ初代長十郎が活躍していた大坂へと乗り込んで行つた。寛保三年の十一月顔見世大坂西の芝居「二引錦幔幕」に出動する。この時の評を示す『役者子住算（大坂）』（寛保四年正月刊）では次のように記している。

まず澤村宗十郎を巻頭に据えるが、これについて大坂の姉川新四郎最貞の男「出入り頭巾着た男」が反対し、姉川こそ巻頭にすべきであると主張する。その発言の中で「此宗十郎殿はいまだ。芸劫もない人頭取はしつておいやらふ。」と言つた後、宗十郎の役者としての活動の経緯を述べ、「江戸風にもまれ給ふ故にか。此度御当地には。沢長殿由縁と待兼居た所に。ずつと出られし内は江戸風の芸。口跡に民屋四郎五郎殿。榊山小四郎との。藤岡大吉との身ぶり。発附がまだも沢長殿のうつりじやといふ人も廿人に一人。此度の貞見せは申さば帰り新参……お江戸の評が極上々吉なれば。定てよかるふと思ふての巻頭はあぶな物。」と批判的な姿勢を示す。江戸風の男がこれに對して反論して喧嘩になりそうになるが、頭取は間に立って仲裁し、「拙者はいかお上手じやと存る。」と評価する。しかしやはり大坂の観客は大喝采したとは思われず、頭取は最後に「先は口跡あざやかにして備つて威の有芸者。二の替に何とぞ。大坂中の悦ぶ狂言を待ちます〜。」とまとめている。翌年正月刊の『役者夫美掃（大坂）』でも最初に「わけて宗十郎殿貞見せはかれ是と御評判が区々でござりましたが」と記している。

寛保四年正月の二の替狂言「大門口鎧襲」は『双蝶蝶曲輪日記』の作者の一人である並木宗輔が歌舞伎作者として加わつてゐるものである。『役者夫美掃』では頭取が「当二ノ替りの敵敷当りを御覧せられたらば。是頭取が貞見せに申せし通。お上手と申せしは見損ひは御ざりますまい三ヶ津の大巻頭と申ても。おそらく海老蔵と此宗十殿に続お上手はすくなうござる。」と言つて、二の替りの当たりの程を示しているが、その後に「其上貞見せは民屋殿口跡にて勤給ひしが。此度は故山下京右衛門殿思ひ入に。故澤村宗慶禪定門（初代長十郎……筆者注）のうつりにて遊す故にか。上方の嬉しがりやう端々の評判は。

日に増夜に増悦ます。」とある。

宗十郎は大坂の観客の受け止め方を計算して演じていたようだ。顔見世の折の評(『役者子住算(大坂)』)に宗十郎が「澤長殿由縁と待兼居た所に」とあり、その割に「澤長殿のうつりじやといふ人の廿人に一人」とあって、期待に答えられなかった。これに対し、今回は初代長十郎のうつりという形で演じて、好評を博したようだ。初代長十郎の面影を明確に打ち出したことにより、大坂の観客の評判が上向いたということであろう。

やはりこの時期の大坂の観客にとつて、長十郎は初代長十郎であった。そして大坂の観客から見れば、宗十郎はまさしく江戸役者であった。

この大坂への進出は必ずしも成功とはいえなかったようで江戸に戻ってきてからの評判記の記述に次のようにある。

わる口組いはく わが寺の佛とおのれ独がとふとがれど。大坂の評判もあやがぬけなんだかして。思ふたよりはやい帰り。大坂の衆の咄で聞ケば。いとま乞の口上に。此度師匠長十郎名を。私に相続いたしくれます様に。たつて申されますれど。みじゆくの私とかく。御見物様のお指図次第に。致ませうといはれたげなが。見物の受ケがわるかつたかよかつたか。やはり元の宗十郎でのお下り。『役者福寿想(江戸)』延享二年正月刊

V 延享二年〜寛延二年

大坂進出は必ずしも十分な人気を博したとはいえなかったが、大坂から江戸に戻る途中で京都で出勤した折の評判はそれほど低いものではなかったようだ。

『役者矢的詞(京)』(延享四年正月刊)では次のようにある。

役者目鏡講曰 ……市川海老殿とお江戸両輪の立物とよばれ。去々年大坂へのぼられての大当り。江戸へ下りがけに京都にてたつた十日。油屋庄九郎の狂言を置土産にして江戸へ下られ。いづれも残念に存じくらせしに。当貞みせより此座へお勤殊に大当り。別号は訥子といへ共。扱々はつきりとした物いひ比類なき名人と存る。

既に元文三年正月刊の『役者年徳棚』江戸の巻の評に「今やつしがたは此人。京へのぼして見たいたしかに当るは此人」とあったが、三代目長十郎は大坂よりも京都の客の好みに合うのであるうか。延享四年に京都で演じた大岸宮内は大当たりとなる。『延享五年三都評判記(江戸)』(延享五年正月刊)には次のようにある。

……よし原くみより……長十殿は京都中村くめ太郎座へのぼられ。顔見せより暇乞迄当りつゞけて前坂の坂田も山下も甚左衛門も及ばぬとの取さた。別して大岸宮内の仕内。前かたより誰レ々もせられたる役なれ共。是程なるはなく。向後とても又と有まじきとの評判。扱暇乞関東小六の大人。さじきも場も五日六日前から頼まねばかはれぬ程の義。お江戸迄も隠れなし。殊に此度下られて。当貞みせ三軒の芝居にて一の当りは長十殿と噂いたすに……●惣十郎殿一ヶ年都にての勤。扱も名人じや扱も上手じやと此人の京にごさつた内は。京中の衆がそこへよつても爰へよつても此人の噂計。それ故芝居はんじやうは申もくだと存る。此度長十郎とあらため中村座へお下り。扱々きつい肥やうかな。初日より江戸はし／＼迄此人大当りの評判。久々に市川殿との出合故諸見物めづらしく思ひ。大入りにてぶたいに道具も立られず。見物一はいにみち狂言せらる、所はわづかの場所。とかく衆人愛敬万人の請取ルは此人

『役者文相撲(江戸)』延享五年三月刊

狂言惣巻軸 無類 中村座

……三ヶの津をめぐりいづかたにてもめいじんよとよばれ。扱狂言にいやみなく。かるくしてしつかりとしまりつよく。口跡はならびなき調子。去年京都にて大岸宮内の仕内。中々ゑんや判官おぐりぐらゐのからうには過た人品との取ざた。京都にて顔見せにも二のかはりにも大岸の狂言にも酒のゑひなりしが。三つながら其やくめのくらゐにそれ／＼にわかれ。おなじ人共おほへず。

この大岸宮内の当たりは寛延元年竹本座で上演された『仮名手本忠臣蔵』の七段目の大星由良之助に影響を与えたことで著名な話だが、そうした影響力を三代目長十郎は持つに至った。京都の方が大坂よりも三代目長十郎を柔軟に受

け入れた印象があるが、大坂は初代長十郎に対するこだわりを残しながらも三代目の実力と人気を意識することになっていったのではないだろうか。

したがって『仮名手本忠臣蔵』の翌年に上演された『双蝶蝶曲輪日記』の中に登場する「長十郎」の名前は、初代の面影も残しながら、三代目長十郎が意識されていると考えるのが至当であろう。

四 まとめ

『双蝶蝶曲輪日記』の六段目冒頭部分は、「けいせい浅間獄」の趣向を機軸に据えて、さまざまな連想や結びつきを創り出しつつ、状況設定をしている。与五郎と妻お照、遊女吾妻の関係や、吾妻と駕籠昇甚兵衛の親子関係。これらは「けいせい浅間獄」の内容や趣向を踏まえながら、説明されていく。大坂においては「けいせい浅間獄」としての上演はあまりなかったが、その趣向や場面がさまざまな歌舞伎作品に取り込まれていたことを踏まえると、観客にはその方法が十分に受けとめられたと想定される。

また大坂での「けいせい浅間獄」は初代澤村長十郎が当たりを取った狂言でもあった。与五郎は吾妻と駆け落ちして来たことを長十郎に見立てて悦に入っており、それがまた笑いを誘うのであるが、長十郎を引き出して来るにも「けいせい浅間獄」は有効であったであろう。しかも本作を上演していた当時は、三代目長十郎が活躍している。江戸役者である三代目に対する大坂の観客の思いには、初代に対するものとは異なるものがあつたであろう。「橙にてや直るらん」の「橙」は、「代々」と掛詞になり、三代目も次第に大坂の観客に馴染んで行くであろうことを言祝いだものとも考えられる。

しかし「けいせい浅間獄」は何といつても京都で人気があつた狂言であつた。下女が隙をもらつて橋本から芝居を見にでかける時、大坂には行かずに京都の芝居に行くのが、普通の感覚であつたのだらう。そのように考えると、橋本という地が、本作上演時にいわゆる京都文化圏であつたことを物語るものといえる。

六段目の冒頭部分は、「けいせい浅間獄」を踏まえながら、多様な遊びを拵え、観客を笑わせ、楽しませつつ、次第に親子や男女の複雑な心情を語るドラ

マへと誘つていくのである。

(注)

1 元禄十二年には中村七三郎と花井あづまは同座(布袋屋梅之丞座・座本山下半左衛門)していた。役者評判記『むさし鑑』(元禄十二年正月刊)による。

2 『三ヶノ津/浅間獄 二の替藝品定』享保十六年三月刊(歌舞伎評判記集成第一期 第十卷による)の記事をもとに作成した。『歌舞伎年表』を参照した部分もある。なおそれ以外の資料により追加した部分については() 付けて注記した。

○京

巴之丞

奥州

元禄十一年正月

座本山下半左衛門

中村七三郎

岩井左源太

元禄十五年

座本大和屋藤吉

櫻山四郎三郎

山本かもん

正徳元年

座本山下かも

澤村長十郎(初代)

萩野長大夫

享保二年二月

座本大和山甚左衛門

大和山甚左衛門

尾上さもん

享保四年

座本大和山甚左衛門

大和山甚左衛門

芳澤崎之助

享保八年

座本榊山四郎太郎

姉川新四郎

芳澤崎之助

享保八年

座本瀬川菊之丞

市山助五郎

津川かもん

享保十三年

座本市山助五郎

市山助五郎

松嶋兵太郎

享保十六年正月

座本嵐小六

嵐三右衛門

富澤門太郎

○江戸

山村座

中村七三郎(十郎)

松本兵蔵

元禄十三年正月

山村座

中村七三郎(十郎)

松本兵蔵

元禄十三年正月

森田座

市川團十郎(景政)

上村吉三郎

享保九年二月

中村座

中村七三郎(二代目)

嵐和哥野

享保十五年

中村座

中村七三郎(二代目)

嵐和哥野

享保十五年

中村座

中村七三郎(二代目)

嵐和哥野

同年

中村座

中村七三郎(二代目)

嵐和哥野

享保十五年九月

市村竹之丞座

市村竹之丞

三條勘太郎

○大坂

市村竹之丞座

市村竹之丞

三條勘太郎

元禄十五年以降か

市村竹之丞座

巴之丞

奥州

元禄十五年以降か

市村竹之丞座

櫻山四郎三郎か

奥州

正徳四年正月 山本彦五郎座 澤村長十郎(初代) 山下亀之丞
 享保三年正月 座本澤村長十郎
 享保十年極月 座本嵐三右衛門 嵐三右衛門 藤井花松

物。なんとぐつとでもいふてお見やれ
 8 『古今いろは評林』

延享三年 八月十五日市山座(江戸下り岩井半四郎暇乞い) 『役者拳相撲』

『双蝶蝶曲輪日記』の本文引用は『新編日本古典文学全集 浄瑠璃集』(小学館)によった。役者評判記の本文引用は『歌舞伎評判記集成』第一期・第二期(岩波書店)による。なお双方とも本文中の区切り点「・」は便宜上全て「。」に統一した。

3 「其後あさまの狂言の。所／＼を取て切入外の外題にていたされし事は。おほくありぬれども。」『三ヶノ津／浅間嶽 二の替藝品定』(享保十六年三月刊) 大坂の巻の記事。

4 「右巴之丞役。京同然に大當り此時大夫もう出やんな。いかふゑんせうくさいとの火鉢の場にてのおとしはねました。……おうしうは上々……此時のあさまは大當り」『三ヶノ津／浅間嶽 二の替藝品定』(享保十六年三月刊) 大坂の巻の記事。

5 『歌舞伎俳優名跡便覧』[第2次修訂版] 国立劇場芸能調査室編(平成十年)による。

6 上方下り男と評判頭取(享保十四年三月刊『役者二和櫻』)。京下り若キ男と澤村組(享保十五年正月『役者美男盡』)。京下り若男と中村座ひいき組(享保十六年正月刊『役者若見取』)。

7 『役者正月詞(大坂)』享保十一年正月刊
 すでに此人のせわせられし。澤村宗十郎殿は。全躰此人の藝をうつして。今御江戸中の見物をなげけ。三軒の芝居からせりあふではないか。

『役者色紙子(京)』享保十三年三月刊
 此人の弟子の惣十郎殿があてらるれば。長十郎殿のはまれといふ物なれど。此澤村殿の自身くだつて。あてられたに代にたてふとは。そりや成まい。

『役者登志男(京)』享保十四年正月刊
 此人の弟子は。江戸に澤村宗十郎。大坂に澤村音右衛門とて。江戸と大坂にて。今とぶ鳥もおちるやうな。上手が有ではないか

『役者若見取(京)』享保十六年正月刊
 お江戸のしばるには。宗十殿といふ面影が今時めいて。此人の藝をうつしてあてらる、からは

『役者節饗應(大坂)』享保十八年正月刊
 すでに江戸にも澤村宗十郎とて。長十郎殿のいきこみをうつして。今江戸の立テ

本稿は演劇研究会(平成十四年八月二十四日於大阪市立大学)において口頭発表したものをもとに成稿したものである。当日同研究会において会員諸氏の多くのご教示を賜った。心より感謝申し上げます。土田衛氏、坂口弘之氏、河合眞澄氏、山田和人氏、正木ゆみ氏からは具体的な解釈について多くご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

* An Analysis of Beginning Expression about the 6th Step of "Futatsuyocyo Kurawa Nikki": Yoko KUROISHI (Department of Japanese Language and Literature) (Received September 30, 2002)

(平成十四年九月三十日受理)